

好きということ

福井県立敦賀高等学校 藤村 瑞希

「空を飛ばすように」と右上がりな字で書かれてある緑の短冊が目に入る。ああ、この頃か
らか、と笑みがこぼれた。

小さな頃から空が好きだ。青と白のコントラストが好きだとか、夕日が空を赤く染めていくの
がきれいだとか、そういった理由もあるかもしれないが一番は、ただ空を見上げていると心が横
に縦に広く伸ばされていくような、心地の良い気持ちになるからだ。

中学三年生の夏、一〇年間続けてきたピアノを辞めたいと言った。ちようど発表会が終わった
頃で、仲の良い友達も何人が辞めた。自分でも想像はしていたが両親は反対した。「何のために
今までやってきたの？」と母が聞いたが、私は黙るばかりで何も答えられなかった。何のために
やっているのか分からなかったのだ。

ある日の夜、母が「散歩、行こう。」と私を誘った。買ってもらったばかりの携帯電話を置いて、
母と外へ出た。少し肌寒く、午前中に降った雨のにおいが少しした。空には三つ四つと星が
見えた。ゆつくりとしたペースで坂を上る。電線が視界に入らない、私の好きな場所だ。「久し
ぶりに来たなあ。」と空を見上げると、さつきよりもはつきりとたくさん星がちらばっていた。

「ピアノ、辞めるん？。」

母に突然そう聞かれ、ドクツと一瞬心臓が揺れた。

「自分が何のためにやとるとるんか、分からん。」

そう言う母は、

「別に何かのためにせんくても、いいんちゃうの。」

と笑いながら歩き始めた。私も後を追った。その言葉がしっくりきたわけではなかったけれど、
その答えはもう見つけられるような気がした。

発表会の時期が来て、本格的に練習を始めた。去年よりもまた更に難しい曲を選んだ。忙しい
時間の合間をぬって練習に励んだ。もうこの時は、自分が何のためにやっているかについては考
えなかった。ただこの曲を弾けるようになりたい、という想いで毎日鍵盤を触った。「練習しな
さい。」と毎年必ず怒られていたのが一度もなく、本番の日となった。初めての“トリ”として
のプレッシャーを少し感じながら、ステージに立ち、イスに座った。「ソ」の二重音がホールに
響くと、もう止まれなかった。照明の強い光と、自分の体が音を奏でている感覚がなんとも心地
良かった。弾き終わった後の、ドクドクと鳴る心臓の音と、自分に向けられる拍手の音は忘れら
れない。ピアノが好きだと心から感じた。

解散となり外へ出ると、もう太陽は沈んでいた。久しぶりに見上げた空はとても広く大きく感
じた。今なら飛べるかもしれないと思っただ。それくらい爽快な気持ちだった。ああ、好きだ
と思った。誰のためとか自分のためじゃない、好きなのだ。心が軽くなって何だか新しい場所
にいるような、そんな気がした。心をくすぐるような風が前髪をゆらした。